

## 復活節第六主日

ヨハネ 15・9-17

2018.5.5

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

司祭の前段階に神学生という時期があり、司祭になるための養成を受けます。その中で祈りや生活の指導を受け、学問を学び、そして神様が司祭として呼んでくださっているのかを問い続けます。そのため一ヶ月に一度、養成担当者から面接を受けることになっていました。

いつものように養成担当者のところにいくと、「あなたが一ヶ月間生活して、一番幸せだと感じたことはなんですか？」という質問を受けました。

昔も今も変わらないのですが、子どもと遊んでいるときが一番幸せなので、そんな話をいたしました。今ではすっかりおじさんになってしまったので、みんな遠慮してあまり近寄ってこなくなりましたが、若いお兄さんの頃には子どもたちがひっついてきました。そして、「おんぶ」「だっこ」「かたぐるま」などを要求します。やがて順番待ちの子どもたちの列ができます。終わった子どもはそれで満足することなく列の後ろに並びます。もちろん、汗だくになり、へとへとになります。しかしそれが楽しくて仕方がないという話をいたしました。

すると養成担当者は「では、何故あなたは子どもたちと遊ぶと幸せだと感じるのですか？」と質問されました。すぐには答えられず沈黙の中で自問自答しました。「幸せを感じるのに理由があるのだろうか？」「楽しいと感じることは主観的なものだから、客観的に原因を探ることができるのか？」「…確かに質問されるとおり、原因があるのかもしれない。それにしても楽しいこと、幸せであることの理由とはなんだろう…」

しばらく沈黙が続いたあとに、その養成担当者はこう言いました。「それはね、子どもたちがあなたのことを愛してくれたから、あなたは幸せを感じるんですよ」。

その言葉を聞いてからそれまで今まで自分の中で抽象的だった「愛」という言葉が具体的なものとして受肉しました。「愛とはなんだろう…」とその時から考え始めるようになりました。そして、愛なくして本当の楽しさや幸せはありえないのではないかと考えるようになりました。自分の望みを達成することで

はなく、愛が成立する時にのみ、本当に幸せになれるのではないか。一人がつまらないと感じるのはその辺に理由があるのではないかと感じます。

愛というのは、いくら偉大な人でも、一人で作り出すことは不可能です。必ず二人以上の人がいないと実現できません。そして、自分のいのちをお互いに与え合うときに愛になります。

今日の福音の中にも書いてありますが、友のために自分のいのちを捨てて愛を成し遂げる人がいます。酔っぼらった人が駅のホームから線路に落ち、二人の人が助けに行き帰らぬ人になったり、また踏切の中で立ち往生している車に取り残された人を助けるために車にかけより、電車にひかれてしまった人。マキシミアノ・コルベ神父のように死刑を宣告された人の身代わりになってガス室に入る人もいます。

その方々が自分の命をかけて示してくださったことは、「わたしたちの普通の日常の愛もこれと同じぐらいすごいことなんですよ」、「愛は当たり前だと思っているかもしれませんが、人がこの世で行うことのできる偉大なことです」ということを教えてくれます。わたしたちは愛が当たり前だと思いこんでいるけれども、「愛はすごい力がある」というのを、自分のいのちをかけて教えてくださった方々を通して、わたしたちは愛がどのようなものであるかを知ることができます。わたしたちはこれらの証を通して知った愛の深さを、無理をせずに自分自身の日常の中で生きていけばよいと思います。

「一粒の麦が地に落ちて死ねば、豊かな実を結ぶ」ともあります。しかし、英雄的な行為を実現することを考えなくても、子どもと遊んだり、家の庭の掃き掃除という、誰にも褒められない、ごく日常の当り前の行為を通して自分の命を捧げ、実現できることなのではないでしょうか。こうしてわたしたちは自分のいのちを惜しまずに誰かと共に生きる時、そこに神を実現させることができます。

ヨハネの福音書の中には「神は愛である」と書かれています。愛を示すことによって目に見えない神を示すことは、キリストの神秘体である教会の大きな使命です。

わたしたちはいつか死んでいく存在ですけれども、自分のいのちを超える愛のために生きるとき、心から幸せになることができます。